

犯罪と二人の批評家

赤木健介

五十四年後の再会である。連続射殺事件の永山則夫についての、江藤淳の文章に出会うのは。それは当時新聞に掲載されたもので、文庫本に収録されたものを、最近再読したのである。

その犯罪の、ひと通りの説明の後に、江藤は最後の一節を次のように結んでいる。「そういう種族のために文学者がなし得ることは、カポーティのようにその物語を書いてやることだけである」（江藤 一九七四、一六九）と。当時は、永山に対する江藤の共感と解釈し、いずれは自分が書くかと思っただけだ。周囲にも、尊敬できる批評家は江藤だけだ、と公言もしていた。この一節に勇気づけられ、励みになったのは今でも変わらない。

ところが今回読み返してみると、どうもそうではなさそうなのである。江藤はこのような少年の内面について書いてい

る。「社会学・心理学的にいわばななめ上から解説を加えることに、一種本能的な抵抗を感じるものである」（江藤 一九七四、一六五）と。続けて次のように書く。

なぜならそれは、正常者が社会生活を構成する正常者たちに対しておこなう解釈でしかあり得ず、もともと社会関係から脱落して生きて来た少年の核心をつらぬくことができないからである。（江藤 一九七四、一六五）

江藤は、ななめ上からの解説は、正常者に対しておこなう解釈でしかあり得ないと言っている。では永山を異常者と考えているのか。そんなことはないはずだ。江藤の頭脳をもつてすれば、永山に対する理解が不可能とは思えない。他方では、永山の文藝協会加入にも反対している。江藤にとつての文藝協会は、正常で善良な文学者たちが集う、知的で品格のよい階層人が集う会なのだ。

上層階級意識の強い人間は無意識のうちに、下層階級からの被害を受けないかと、被害者意識をもっているものだ。自分分は決して加害者になることはない。加害者はいつも他者なのだ。社会的脱落者には、仲間になつてもらつては困るのである。

江藤の他の作品を読むとわかるが、彼は新興明治国家形成の一翼を担う、国是に真摯に取り組む階層の、しかも有能で、ある程度高い階層に上り詰めた一族の一員と意識している。

しかしこの階層、あるいは所属意識は、合理的な根拠のない、幻想的な確信にすぎない。江藤は自らの居場所や所属についての存在論的準拠を明確に把握し、かつ疑うことなく安住している。それ故に、永山のような社会関係から脱落した正常でない少年と関わることには、あまり興味がないのである。

いかにして江藤淳になったのかを真摯に問うことなく、存在論的安心感に基づいて、何か不思議なものに導かれ、なるべくして形成されたと考えているようだ。目的論的世界観を説明した談野安太郎の著作を引用する。

アリストテレースの目的論的世界観によれば、質料―形相の発展的あるいは上昇的段階において質料はつねにそれより一段高い形相によって動かされつつ形成され、もつて本来その内に含んでいる目的を一步一步実現して行くものである。(淡野 二〇二一、六九)

江藤の裡に、そのような考えがあつたかもしれない。一連の彼の著作を読めば、そのように読めてしまうのである。ならば、書いてやることだけであるという文言は、永山に対する共感などではなく、哀れな罪びとに対する神の許しの言葉としか読めない。江藤にとって、所詮永山は得体のしれない、理解不能なよそ者、社会的脱落者である。だからこそ、善良な市民は憐れな者を書いてやるしかない。深入りすることはないので。最終的に、江藤は自らの安定した存在的基盤に立

って、一族の出自探求に向かい、湧き水の一滴にその源泉を求めたではないか。この問題の軌跡をたどり、江藤の他の文章を再読すれば、親近感や尊敬が一気に輝きを失ってしまった。

その絡みで、永山の文藝協会加入についての推薦人であり、対極にいる秋山駿に目を向けてみたい。江藤にとって、永山は社会的脱落者であり、善良な市民から見れば、関わりたくない危険人物なのだが、秋山は自己の問題と捉えている。秋山は『内部の人間』や『内部の人間の犯罪』で書いている。秋山は言う、「内部とは、いわば、己れの意識のことである」(秋山 一九七二、八二)と。また言う。

内部の人間とは、自己自身を閉ざしている人間、自分の手で自分を内部へ閉ざしている人間のことである。しかし、正しくいえば閉ざすものは自分の手ではない。なぜ、だれの掌が、自分を内部へ追い込んでしまっているのか、自分自身にもわからない。それが本当の内部の人間だ。

(秋山 一九七二、一三四 二〇〇七、三〇―三一)

このように定義する内部の人間の犯罪を、秋山は執拗に書く。これこそ秋山の追求する文学の本質であり、自らの問題なのである。小松川女高生殺し、連続射殺事件、その他諸々、犯行の理由がよくわからない事件ばかりを取り扱う。よくわ

からないと、要するに、社会的に通用する意味や言葉で理解できないということである。

江藤の言うように、社会学、心理学的な解説に本能的な抵抗を感じるのは、秋山も同じであろう。江藤はそれ以上に追求することなく、その場から立ち去ってしまうが、秋山はそこからまだ進む。

そしてだれの掌が自分を内部へ追い込んでしまっているのか。自己なのか、あるいはどのような存在者なのか、それを問題にする。なぜ犯罪を実行したのか、その根源的な選択のメカニズムを解明したいのである。そして実行行為者の内部を知りたいのである。本人の根源的自由が生み出したものか、それとも遺伝や環境、生育から生じた得体のしれない構造なのか。それが問題なのだ。根源的自由が生み出したのなら、棺桶に入るまで再生の希望をもてる。なぜなら、サルトルの言うように、われわれは自由の刑に処せられており、つねに未来に投企でき、あるいはせざるを得ない。そうだとすれば、いつかは新しい人間に生まれ変われる。死に至るまで希望はなくならない。無意識の構造が決定しているなら、我々に自由はない。目的論的な世界観、宿命論に生きれば、生きる意欲さえなくしそうだ。希望は萎縮してしまう。

秋山は永山の裡から醸し出る、自らと同じ匂いに惹かれたのである。秋山が探求に挙げるのは、まずはカミュである。不条理の文学、その発想は、社会とのかかわりの中でつくり上げられた正常で善良な人間から発せられる言葉である。主

人公は、社会のことにほとんど興味がない。殺人行為の時もそうだ。秋山は、予審判事がムルソーに尋ねる場面を引用する。予審判事には理解できないのである。

彼は、私の例の一日を物語るように催促した。私は、既に彼に向かつて話したことを、もう一度述べ直し、彼のために要約した。レエモン、浜、海水浴、争い、また浜辺、小さな泉、太陽、そして、ピストルを五発撃ちこんだこと。(カミュ 一九五四、八五)

秋山はこれらのことを、「ムルソーの周囲をびつしり埋めている微細なもの達から、ごく自然なものの流れのように、連続して流れ出しているところに特徴があるのだ」(秋山二〇〇七、一四〇)と述べている。ムルソーの意識は、個別の物事に向けられ、社会が名付けた単語で表現しているが、社会が理解できるように、意味の関連は付けられてはいない。

予審判事が知りたいのは、それらがどうして殺人に至る理由になるのである。そしてわれわれも同じ思いなのだ。なぜだ、である。秋山は「微細なもの達の声は、いわば人間の声がなくなるところに始まる」(秋山 二〇〇七、一四一)と言っている。微細なもの達の声とは、物そのものの声なのか。またそれを独自のたとえで表現している。

ただし、われわれには連合赤軍のそれが、現実から剥がれて、突出して、宙に浮いて行なわれた人間の異常な行動ではなく、このムルソーの場合のように、零下十度、押し麦、ラーメン、寝袋、洗われぬ肌、臭いのする着物、山小屋といった、現実の微細なものとごく自然に連続して、そこから流れ出てくるような行為であることを、見出すだろう。(秋山 二〇〇七、一四一)

自由か、それとも無意識の構造か。人は変われるのか。それを秋山は知りたのである。また、他者に仮託するという。

「イッポリートは、自己の正体、自分の存在の意味を追って休むことを知らない」(秋山 一九七二、一四)。これは秋山自身なのだ。存在論者の言葉であり、求道者の独白でもある。イッポリートや永山の中に自身を見たのである。さらに言う。

その行為が、さしたる異常さもなくおこなわれた一種の自然なものであること、われわれの現実生活のなかにたいていして特徴もなく普通に存在しうること、それがごく容易に現実のそこにあることによつて、われわれの有する現実や生の内容には、まだ何か新しい局面があつて、それが照明されてはいないのだ、ということを告げている。

(秋山 二〇〇七、一一八)

秋山はここまでわかっているにもかかわらず、小説家ある

いは誰か他者、または犯罪者本人が書くことを、死ぬまで期待していたのである。秋山ならおそらく書けたであろうし、書かねばならなかった。秋山こそ適任者だったのだ。朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり、と口ずさみながら、暗闇の中をさ迷い歩いているかもしれない。

殺人が容易に現実の中にあるとすれば、自殺も同様であろう。もちろん各自死者には、個別の異なる生活があり、苦悩の内容も違う。それが自然の風景の中で、青空、頬をなでる風、こそばゆいまつげ、借金、トラック、助手席、風圧、飛び降り、というようなことも可能性がある。自殺願望者ならこれらの風景や感覚に見覚えがあるはずだ。助手席での風圧、電車が目前を通り過ぎる時の風圧、これ程度なら、飛び降りても痛くも苦痛もない、という確信。結果、実行あるいは思い止まりである。この決断の瞬時の判断の違いはどこから来るのか。個人の自由な決断か、組込まれた生命のシステムの発動か。科学的な根拠の解明があるのだろうか。現実には、判断、実行、あるいは制止の原因を解明するのは不可能だろう。最終的には、秋山と同じ結論になつてしまう。秋山は立ち止まることはない。常に自らを超越しようとして、立ち位置は不安定のままなのだ。

参考文献

秋山駿『内部の人間』昌文社、一九七二年

秋山駿『内部の人間の犯罪 秋山駿評論集』講談社文芸文庫、
講談社、二〇〇七年
アルペール・カミュ、窪田啓作訳『異邦人』新潮文庫、新潮
社一九五四年
江藤淳『文学と私 戦後と私』新潮文庫、新潮社、一九七四
年
淡野安太郎『哲学思想史 問題の展開を中心として』角川ソ
フィア文庫、KADOKAWA、二〇二二年